



ひかりの旅

ポケットには
木の実とガラスの星

ときどき高い空が恋しくなる
てのひらで回転する風景
親指と人さし指に虹がかかる

星の匂いをもとめて また
ひかりの旅をはじめ

(2010)

星霜

星が降る
そんな時代がありました

いちどだけ
とおい星からの便りが届いたのです
あなたの青い星はしあわせの星です
たったそれだけの
シンプルな手紙です

私もすぐに手紙を書きました
けれども
とおい星の
そのひとの星を探すうちに

おもわぬ歳月がすぎたのです

流星群がとびかう夜に
せわしく宇宙の手紙は配達されるのでしょう
ときには
たった一通の手紙が届くのに
幾億光年もの時がたってしまうのでした

ですからまだ
私はそのひとに会えません

(2005)

星の命名

始まりと終わりが
空のどこかにあるのだろうか
ぼくたちがひとつの光を見うしない
浮遊する
もうひとつの光を見つけるとき

草がもえる道で
ぼくたちは風になるだろう
蕾をおしひらく花の声を聞くだろう
影にみちびかれて迷子になり
探しつづけて遠まわりするだろう

星と星は
音のない音で響きあい

風は
いのちの始まりを告げるだろう
かすかに花を揺らす
そんな言葉で

名のない星は掌のなかにある
伝えたい言葉はまだ生まれない
指の先まで熱くなって
小さな鼓動を打ち始めている

(2009)

ぼくの星

星をひとつ
きみからもらった

空の夜がすこしだけ暗くなって
ぼくの夜がすこしだけ明るくなった

夢のなかで
きみに長い手紙を書いている
いくども書き直したので朝になった
たいせつな星のことは書かない

ぼくの星をだれも知らない
夜明けに
きみの夢のなかへ

そっとかえす

(2007)

星の時間

たぶん

星と星をつないでいる

ふたり

空の翼がひらくとき

いつか

指と指をふれあって

星になれるかもしれない

ふたり

空の翼にのるとき

光と闇をくぐり抜けて

星の時間を飛びつづける

そうして

すべての星を見失うまで

ふたりは星を恋するだろう

(2008)

星の本

その本をひらくと
夜空のページです
星がいっぱいです

まるい窓としかくい扉がある
部屋のような古い本です

星占いの闇とか
散歩する川とか
瞑想する木とか
欠伸する魚とか
すべて星の名前です
ところどころに鍵穴があったりとか

本を閉じると
まっくらな夜です
わたしは星のない国で
あとはただ
古い本の夢をみます

(2007)

コスモス

いちまいにまいと
うすい花びらを飛ばしながら
わたしたち
風になりましたね

あなたに教わった
星の名前はカタカナばかりで
わたしはひとり
知らない国を旅するようです

星のように
輝くことはできないけれど
小さな目印として
生きることはできる

ゼロと無限の
星の宇宙を漂いつづける
小さなわたしにも
名前をください

(2007)

てんとう虫

背中の星が重いから
飛翔しても

飛翔しても落ちる
てんとう虫の
小さな宇宙

野の草よりも軽く
露ほどの輝き
昼間もなお
星でありつづける

あまりにも大きなものの中で
あまりにも小さく生きる
背中の星の
数ほどにかなしむ

だからときどき
宇宙の外へと
飛び立とうとする

(2007)

星座

星と星をつなぐ
あなたの指のさきで
銀色の鳥がかがやくのを
はじめて知った

あるときは
あなたの指がなぞる
唇のかたち
乳房のかたち
わたしの知らないわたしのかたち

そのとき
輝きながら全天がまわる
あなたもひとつの輝きとなって
輝きのなかに消えてしまう

はるかな星の距離を
夜の翼は越えようとする
その星の名前を
わたしは思い出せない

遠いギリシャの神々のだれか
そのとき落ちていった
星の名前をおしえてください

(2006)

七夕

彼女の誕生日は七月七日
七夕の日です
そのせいかどうか
彼女は星がとても好きなのです
星のブローチとか
星の携帯ストラップとか
もしかしたら
三つ星のレストランとかも

でも彼氏は
せっせと星の砂を集めています
365個の星で

空のカレンダーをうめる
そうしてやっと
ふたりは会えるのです

(2008)

U F O

からまつの暗い林を
どこまでも歩いたような気がする
急に空が明るくなって
その先に白い家があった
そして白い服のきみの
空へ伸ばした腕が
ブラウスの袖から露わになって
めくるめく
宇宙人の細い腕が
一瞬だけみえた

きみの空には
しばしばU F Oが飛来するという
ぼくにはそれは
赤いナナホシテントウムシだったり
オオキンカメムシだったりしたのだが
きみは小さなU F Oを掌にのせて
ふしぎな言葉を交わす

ぼくの空に
円や直線をえがく
きみの指先を追いながら
ぼくは不思議な宇宙語を教わる
あなたが好きだとか
あなたのことは忘れないとか

キスしようとか
永遠だねとか
とつぜん天から降りかかってくる
そんな言葉ばかり
そして最後は
テントウムシの背中には星があるから
いつでも宇宙には手がとどく
きみはそう言い残していなくなった

それは夏の終わりで
ぼくは永遠という宇宙語が思い出せず
ナナホシテントウムシは
ぼくの掌から飛び立とうとして
そのまま地球の草むらに
落下したのだった

(2008)

流星群

おれんじ色の船にのって
ぼく砂漠へ行くの

降りしきる流星群と出会ったら
きみのために手紙をかく

そうしてそれから
真っ赤なポストを探して
三千年の旅をする

(2009)

地球の向こうへ

草や花で
地球はまるく縁どられている
ときには腹ばいになって
虫のように
始まりの匂いを嗅いでみる
そのとき地球は息をひそめるだろう

伸ばした右足と左足で
みどり色の海をこえる
吐く息の雲につつまれて
森と森がつながる

照葉樹林をくぐりぬける
滴りおちる樹液の音に
耳たぶが染まる

言葉のようであり
言葉のようでない
どこまでも虫にもなりきれず
息をひそめて
地球の向こうへと
指をのばす

(2005)

星の岬

屋上の天体望遠鏡を
水平に近い角度に傾けて
やっとその星をとらえたことがありました
あと三日の百武彗星
あれはアトランタオリンピックの年でした

星霜という星の言葉を知る
わたしたちの頭上を回りつづける
星も年輪をかさねているという
星のいのちの始まりを
あなたは探していた

珊瑚と熱帯魚の
四月の海がまどろむあたり
疾駆する車のウィンドウを
文旦の風が吹き抜けた
ゆうべ彗星が消えた浜では
打ち上げられた貝殻が
光を失った星になって
白く眠っていた

太平洋の波に向かって口をひらく
ふかい岬の洞窟
.....心ニ観ズルニ明星口ニ入り
えらいお坊さんのように闇をみつめる
あなたはいまも
星を追いかけるひとですか

真昼の闇の奥から
鯨の海をさがしてみる
空と海がひとつに溶けあう時合いには
奇跡の星が見えるかもしれない

(2004)

ミルクィーウェイ

ぼくはほとんど水だ
と彼は言いました

手の水をひろげ足の水をのばす
水は水として生きて
水として果てる
そのとき大気の間とつながり
水からいちばん遠い水と出会う
そこで彼は
はじめて彼女の水に触れました

彼女は言う
水から生まれ水を孕むわたし
軟らかくて丸い
始まりはいつも一滴のしずく

さらに大きなものを
ふたりは宇宙と呼びました

(2008)

